HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	高山寺における聖教目録の変遷（二）：補遺
著者	徳永，良次; TOKUNAGA, Yoshitsugu
引用	北海学園大学人文論集(59): 98(八一)-64(一一五)
発行日	2015-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

高山寺における聖教目録の変遷（二）

――補　遺――

徳　永　良　次

はじめに

本稿は、前稿の続きとして、前に言及出来なかった課題、また、その後得られた新知見も加えて、高山寺における聖教目録と、それに関わる問題について検討する。まず、鎌倉時代の明恵上人による創建以来、寺内において聖教目録がどのように扱われたのかについて検討する。つまり、前稿で検討した内部徴証による高山寺聖教とその目録の変遷とは逆に、聖教目録自体に記載されてきた「目録」の様相と変遷を辿っていく。次に、現存する目録には記載されていない寺宝の経過について整理しておく。

例えば、『鳥獣人物戯画』、『華厳宗祖師絵伝』を主要な寺宝として検討し、必要に応じて他の絵画・仏像等についても言及する。これを辿ることで、高山寺資料とそれを記載した聖教目録の変遷について検討可能かどうか考えてみたい。同時に、これら目録類のほとんどが、現在のように一三五函に収納された時期等について考察する。

一　高山寺聖教と目録の記録

高山寺の聖教の重要性は、国語史研究上、極めて価値の高い資料が大量に、かつ、まとまって現存しているこ

（八一）

とであるのは言うまでもない。それも平安時代後期から鎌倉時代にかけての聖教類がまとまった形で現存しているだけではなく（それだけなら、他の古社寺にも存在している）、そのほとんどすべてが聖教目録に記載され、来歴が判明しているという点で希有な存在である。(注一)

この高山寺聖教は鎌倉時代から連綿として受け継がれてきているが、しばしば所属・編成替えが行なわれ、その度に聖教目録との対照（インスペクション）が実施され、場合によっては新規に聖教目録が作成し直されることもあった。この点については、先行研究においてすでに繰り返し指摘されており、筆者も前稿で詳述した通りである。

その時々において作成された聖教目録には、当時、高山寺が保有していた他の目録が記載されることがあり、これを辿ることで、寺内の聖教目録が時々の高山寺僧によって、どのように取り扱われてきたかについての変遷を知ることが出来る。そこで、以下、高山寺に現存している聖教目録に見える聖教目録やそれに関連すると考えられる記事を、可能な限り年代順に抜き出して検討していく。なお、これらの資料には直接高山寺聖教とは関係のないと考えられる目録も記載されているが、明らかに関係ない資料は除外する。(注二)

鎌倉時代寛喜年間～建長以前

この時期に作成された目録は、以下の二点が知られている。

1　『聖教目録禅浄房灌頂』（寛喜三年、建長三年）

この聖教目録は、禅浄房の次の目録と一体のものとして作成された灌頂に関する目録である。前半は、明恵上人の弟子である空達房定真が寛喜三年に作成したことが第八紙に記載された自筆奥書から知られる。以降、建長三年に、義淵房霊典が一箱を追加し目録を編成し直し、あわせて校合を加えたものである。

禅浄房（空弁とされる）は、寿永二年（一一八三）生、高山寺資料には安貞元年（一二二七）から記録が見え、寛喜二年十二月『梵網経記』の書写奥書に「病中右筆奉書写畢」とある記事で途絶えている。そのため、高山寺

においては明恵上人より十一歳年下で晩年の弟子であること、十点程度の聖教書写・校合に従事し、時に明恵上人の代理として説戒を行ったことが知られるのみである。

このように、禅浄房の事蹟には不明な点が多いが、次の2（仮称）『聖教目録禅浄房書籍』と、本資料『聖教目録禅浄房灌頂』との二点が作成されるなどを考慮すると、高山寺において聖教を管理する立場であったかと見られる人物である。

目録に記載された聖教は、その後、江戸時代寛永年間の覚深法親王の命による高山寺再建に伴う経蔵整理の際に、『法皷臺聖教目録下巻』として施入された。(注三)

本目録には、聖教目録に関する記事は見られないものの、以下のように高山寺経蔵に関する注目すべき記事がある。

（第一紙）
一合上　在経蔵
（第四紙）
一合中　在経蔵
（第七紙）
一合下　在経蔵　（全文抹消）

ここにあげた記事は、禅浄房の灌頂関係典籍が上中下三箱に分けて納められていた事を示している。それぞれにある「在経蔵」の書き入れは別筆であり、おそらくは空達房定真の後にこの目録を再整備した義淵房霊典により、インスペクションが行われた際のものであろう。ここでいう「経蔵」とは、寺内にあった東西経蔵の内、東経蔵を指すと考えられる。(注四)

2　（仮称）『聖教目録禅浄房書籍』（所在不明『禅上房書籍欠目録』が現存）

この資料は所在不明である。代わりにその欠本を示したと見られる『禅上房書籍欠目録』（第一部第248号）が現存する。以下、この『禅上房書籍欠目録』（以下、「欠目録」と略称する）から知られる事項について言及する。(注五)

現存の「欠目録」を見るに、（仮称）『聖教目録禅浄房書籍』

は少なくとも四十六箱の編成であったことが知られる。箱の編成は、前半が真言関係典籍で仏典、儀軌、続いて次第、抄物となり、第十四箱は弘法大師空海に関わる典籍が配置されている。その後、華厳・法華経関係典籍と続き、第四十四箱以降は、漢籍・辞書など外典が納められていたことが伺われる。このような編成は「禅浄房」という名称が付けられてはいるが、一人の僧侶による蔵書とは考えにくく、恐らくは高山寺の公的管理に基づく聖教目録として作成されたのであろう。奥書等の記録は存しない。しかし、現存する『聖教目録禅浄房灌頂』の一次奥書（寛喜三年）から考えるに、鎌倉時代中期、寛喜年間以降建長年間までの成立であり、当時行われていた高山寺聖教とその目録整備の過程で作成された資料と見られる。

現存する『禅上房書籍欠目録』を見る限り、聖教目録の記事は見られない。

鎌倉時代建長年間

この時期に高山寺の聖教に対する目録の大規模な整備があったことは確実である。先述した通り、目録作成は明恵上人存命当時の寛喜年間から始まっていたが、この建長年間に一応の完成を見たとするのが一般的である。以下、この建長年間成立とみられる聖教目録と関連資料をあげておく。

3　『高山寺聖教目録』（建長二年カ）

鎌倉時代の大規模な目録作成活動は、先にみた『聖教目録禅浄房灌頂』の第二次の作成と時期を同じくする建長二年から三年にかけて行われたと考えられている。本目録もこれと同時期、すなわち建長二年に義淵房霊典が後嵯峨院の命により、撰進されたものと考えられる。(注六) ただし、この建長二年撰進という事を示す確実な資料は、全く見いだすことが出来ていない。わずかに江戸時代末期の高山寺僧慧友と推定される後補包紙への書き入れが知られるのみである。

この聖教目録は、次の『高山寺経蔵聖教真言書目録』と一具として作成された目録で、高山寺経蔵に所蔵される、真言書以外の内典外典の目録である。(注七) この『高山寺

経蔵聖教真言書目録』の奥書が建長三年であることにより、本資料も建長年間の成立とされているのである。

これが、当時の東西経蔵いずれの聖教を記載した目録であるか、あるいは、全く別種の聖教目録であるかについては不明である。ただ、高信撰述とされる『高山寺縁起』の東経蔵部分の記事に「此外華厳天台法相等章疏并真言書籍仏像等納之目録別在之」とあり、ここに言う「目録」の中に、この二本が含まれていると見えなくもない。

本稿に関連する記事は、以下の通りである。

（第一百一乙）
此之外顕範律師聖教一合目録具書籍
禅忍房聖教并林月房施入聖教等目録別二在之
潅頂道具一合目録在別

右のように、本資料に見える当時の記事から、この時代、目録にはすでに他の聖教目録がまとまった形で記載されていることが分かる。しかしながら、記載されている聖教目録は二点（正確には三点）のみで、先に取り上げた1、2の禅浄房関係の聖教目録や、東西経蔵にあったとされる一切経の目録は見えない。(注八)

「顕範律師聖教」と「禅忍房聖教并林月房施入聖教等」は現在は一巻にまとめた聖教目録として現存する。ただ、ここに言う「等」が具体的に何を示すかについては不明である。(注九) あるいは、現存する第一部第249号の『聖教目録』にある「理行房聖教目録」かとも推定されるが確証はない。

4 『高山寺経蔵聖教真言書目録』（建長三年）

先の、3『高山寺聖教目録』と一具のものと見なされる聖教目録である。建長三年、十眼房長真の作成になるもので、奥書は以下の通りである。

（奥書）
第十三（抹消）
潅頂道具一合目録道具櫃納之在東経蔵（別筆）
已上十五合一所置之高尾上人
御坊御書等

建長三年辛亥四月六日校勘之了　長真記之

先述した通り、本資料は寺内経蔵の真言書に関する所蔵目録であり、『高山寺聖教目録』は真言書以外の書籍目録という関係となっている。ここで言う「真言書」は東経蔵に収蔵されたものとする先行研究もあり検討を要する。(注十)

本資料に見られる聖教目録の記事は、以下の通りである。

(真第八)
小野抄目六一
(真第十五)
根本大和尚真跡策子目録一〻
(巻末奥書)
潅頂道具一合目録道具櫃納之在東経蔵　(別筆)

目録内に記載された「小野抄目六」は真言宗小野流のいずれかの書籍目録であると考えられ、高山寺の聖教目録とは直接的な関係はないであろう。しかし、(真第十五)に記載されている「根本大和尚真跡策子目録」は、弘法大師空海が中国から請来した三十帖策子についての目録である。本資料は、高山寺経蔵に現存しており、表紙に「真十五」の識語があり、これと矛盾しない。

巻末奥書の別筆記事は『高山寺聖教目録』にも同様の記載があり、関連がありそうであるが未勘である。この記載は別筆と推定されているため、後世、建長以降いずれかの時期に所属替えが行われたものであろうか。あるいは、先の「根本大和尚真跡策子目録」が真十五箱に収蔵されていることに合わせて、後年、追加して施入したものかも知れない。つまり、聖教目録類を『高山寺聖教目録』同様、意識的に巻末に特立したものと考えられる。

注目すべきは、「目録道具櫃納」という書き入れである。ここで言う「目録」が具体的に何を示すのか、潅頂道具についての目録であるのか、「聖教目録」と「潅頂道具」をともに櫃に納めたということなのか、現状では不明である。道具についての目録であるなら、「目録道具」とせず「道具目録」とする方が自然とも思われるが断定すべ

き証拠がない。

5　『高山寺縁起』（建長五年　推定）

本資料は、聖教目録に関しての一次資料とは言えないものの、創建当時の高山寺の概要を知る上で重要なものである。奥書によれば、神尾山の開祖とされる明恵上人の弟子、順性房高信の作成という。その奥書は以下の通りである。／は改行を示す。

建長五年辛丑三月日
　依蒙　仰随勘得粗注進之
　　沙門高信
寫本云
　弘安九年十月七日書
　神尾山本申野(ママ)於北尾首尾三日書写了比丘尼正念
于時永正十一稔應鐘中九日於西山高山寺東坊方便智院草庵以善財院御本如形／
写之者也殊更■折帋軽賤之間且雖愚案後日可加清書之間染悪筆畢／
　　求道貧愚弁朝従年廿五才
（別筆）
「天文第五丙申七月十七日以虫払之次少々披見之未校本也求得証本可校合者也／
権少僧都裔怡（花押）
永禄五二廿二以私本之古本校合了」

本資料は、建長五年に高信が作成し、弘安九年に正念が書写したものを、永正十一年に善財院本を以って方便智院第九世明律上人弁朝が書写したことが知られる。つまり、建長五年の高信による原本ではないものの、鎌倉時代中期、建長年間当時の高山寺の偉容を具体的に知ることのできる数少ない資料である。

本資料の内容の概略を示せば、寺内塔頭についての詳細な記述はもとより、そこに所蔵・安置されている聖教・仏画・仏像の記録、関連する逸話、行事等の記事に至るまで詳細に記されている。

（八七）

以下、本稿に関連する記事を列記する。

（9オ）

一、経蔵二宇　　東経蔵

本是羅漢堂東辺立之而羅漢堂造立之刻於石水院西岸移造之且怖火難遠人煙也

奉納一切経附貞元録

合大小乗経律論及賢聖集等

惣一千二百三十八部

合五千三百五十一巻内

又本四十四巻見在五千三百七巻信行禅師三階仏法等已下四十四巻火而相当上人十三年之忌辰続彼欠本満一部畢

（9ウ）

此外華厳天台法相等章疏并真言書籍仏像等納之目録別在之

（10オ）

西経蔵

奉納一切経唐本福州本云〻

合大小乗経律論賢聖集等六千三百三十九巻

（八八）

中央奉安置木像大日如来像一躯

右一切経并経蔵法性寺刑部入道不知実名所沙汰進也

この記事は、個別具体的な聖教目録を記載したものではないものの、高山寺草創期の中心経蔵が東西に分かれて二宇あったこと、そして、それぞれの経蔵に一切経があり、かつ、東経蔵には華厳天台法相および真言書籍、それに仏像などが収蔵され、その所蔵目録も存在していたことが知られる。その目録が具体的に何を示すのか定説を見ないが、一説に『高山寺聖教目録』と『高山寺経蔵聖教真言書目録』がそれであるとする。(注十一)

室町時代文明末頃（十五世紀末）

6　『方便智院聖教目録』（旧目録）（第四部一九九函2、同一七七函89、第一部243、242）

高山寺内の塔頭の一つである「方便智院」は、明恵上人の弟子空達房定真を第一世とする由緒ある僧坊であり、当初から経蔵があったとする説もある。方便智院の成立時期については、宝治元年（一二四七）の仁真書写

本の奥書に見えることが指摘されている。(注十二)

その経蔵と、現在知られる『方便智院聖教目録』との間にいかなる関係があるのかについては未だに解明されたとは言い難いのである。そもそも『方便智院聖教目録』の成立時期についても定説を見ない。現存する目録はいわゆる「旧目録」とされる室町時代文明年間書写と目される資料が合計三冊現存している。しかし、その内容・来歴には不明な点が多く、如何なる過程を経て現在の三冊に至ったかを解明することは困難である。他には、江戸時代に通称「新目録」と呼ばれる『方便智院聖教目録付御流目録并諸目六』（第一部第一九三号9）一巻があるのがすべてであって、他の高山寺古目録のように鎌倉時代に遡るものは現存しない。

以上のように、塔頭としての方便智院は研究が進んでいるが、その所蔵目録としての成立の事情は解明されていない。推論を排して現状を眺めれば、室町時代中期の収蔵体系が知られるばかりである。(注十三)

さて、本資料には次のように、高山寺聖教に関する目録を意識的に収蔵したとみられる記事がある。以下、関連する部分を記載順に抜書する。当該資料の目録上の分類標目を「　」に、位置は冊・丁付けを（一6オ）のように示しておく。（　）内の一は第一冊目、6オは記載位置である。

（一6オ）
「潅頂」
小野経蔵目録

（一13オ）
「第九秘録」
高山寺経蔵聖□(教)
勧修寺慈尊院□
小野抄目録禅門作目録／常喜院作
貞元新定釈教目録巻。上下
□録

（一13ウ）
法皷臺聖教目録中　大和上御策子等目録
真言宗所学目録　根本大和尚□(真)跡策子目録

（八九）

常暁入唐目録
伝教等諸師作書目
大師御作目録□
御作目録　伝法院
顕密書籍目録
十無盡院聖教目録
正達御房御伝書目録　道具
目録

「第九勧私三」
（一15オ）
真言目録
（二2ウ）
「勧巻内上（抹消）第十三■醍上」
真傳目録

「第卅八秘抄上」
（二23ウ）
真言宗所学目録
目録

（九〇）

五大院真言抄目録
真言所傳目録
御作目録傳法院御経蔵本
顕密書籍目録　東寺一
十無盡院聖教目録　常喜院
正達正達御房御伝書目録
伝教等諸師作書目録
大師御作目録

（二26ウ）
「第四十秘録」
真言八家惣録上中下二本有之
高山寺経蔵聖教真言書目録
勧修寺慈尊院経蔵書籍目録
小野抄目録禅門作目録法三御作目録常喜院作目録新左秘録
貞元新定釈教目録巻上下　常□□□
法皷臺聖教目録中　大和上御策子等目録

（二32ウ）
「第四十六木禾」　目六小箱
此目六外　春日御宅□

上人御筆雑々一結入之

「第四十七教相下五十御作」

（三3ウ）

真言宗初学書目録所

新請来目録二本

（三4オ）

御作目録

「第七十善知識讃嘆」

（三又25オ）

真言目録

本資料には高山寺所蔵にかかる聖教目録が、まとまった形で三カ所記載されている。その記載位置は、一冊目の13丁表「第九秘録」と、二冊目23裏「第卅八秘抄上」と同26裏「第四十秘録」である。

ただ、記載されている聖教目録を見ると大部分で重複していることがわかる。しかも、一冊目の聖教目録は13丁表裏面ともに墨書にて大きく×印が付されている。

聖教目録の記載順も、一冊目を基準に見ると、二冊目は26丁裏が最初で、続けて23丁裏へと連続する形で三点ほど一致しない聖教目録があるもの[注十四]、配列は完全に一致する。

つまり、一度は一冊目に一括して記載された聖教目録が、何らかの理由で新たに第二冊目に記載位置が変更されたのである。二冊目の記載順が逆になっているのも、本来は26裏が最初であって、23裏に続いていたのである。結局は、当初「第九秘録」に一括して記載された聖教目録は、後に「第四十秘録」へと変更したものが、現存する『方便智院聖教目録』（旧目録）の姿なのである。

「第四十六木禾」（二32ウ）にある「目六小箱」の記事は、本稿を考える上で注目されるが、原紙の下半分を欠いており、具体的にどの「目録」を示すのか、内実は不明である。

ただ、この時期に、本資料において聖教目録を一括して保管・整理しようという明確な意思が見えるのは注目

（九一）

すべきである。

江戸時代

7　『方便智院聖教目録付御流目録并諸目六』(新目録)(第一部第一九三号［9］)

江戸時代初期の寛永十年前後に、仁和寺の覚深法親王の命により、高山寺の復興が行われた。この時に経蔵も大規模なインスペクションが実施され、聖教類整備により新たに作成された目録が本書である。奥書はないものの、現在、高山寺聖教類第一部193号として木箱に一括された七種の聖教目録の一つであることから同時期の製作と見て齟齬はない。

室町時代に作成された『方便智院聖教目録』(旧目録)が、戦乱等の理由で相当な被害を受けたため、新規に二十箱にまとめ、箱番号も改編し、さらに新たに「御流」聖教を追加したものが本資料である。その際、旧目録にあった聖教目録の部分は現存しているものを一括し巻末に「諸目録」として特立したのである。この点について金水敏氏は「(方便智院聖教目録の新目録にある朱書書入

レは)古目録の七十余合(箱)について、現在見える分を拾い集めて二十合に納め、新たに一巻とし、併せて御流の二合と諸目録の一合を付した(注十五)」とされている。さらに補足するなら、「諸目録」の内訳は『方便智院聖教目録』(旧目録)の「第四十秘録」に集められた、鎌倉時代以降、高山寺に伝来した聖教目録を「古目六」とし、新たに寛永年間に作成した一連の目録と合わせて巻末に記したということである。同時に、「都納一合」とあるように、かつては古目録、新目録が一括して一つの箱に収められていた様子も知られる。

これが、現在の高山寺経蔵に収蔵されている第四部第一三五箱の当初の姿である。

(第一紙)

方便智院聖教目録付御流目録并諸目六

「東第十四」

(第八紙)(原第二十紙)

真言宗所学経律論目録一巻

「東第十六」
（第十二紙）（原第二十四紙）
上人製作目録并花厳宗血脈一巻切紙
（第十三紙）（原第二十五紙）
諸尊法目録一巻
（第十四紙）（原第二十六紙）
「東第十七」
儀軌本経私記等目録一巻
（第十七紙）（原第二十九紙）
已上方便智院廿合目六畢（朱書）
「御甲」
（第十八紙）（原第三十紙）
尊法目録澤一帖
野月私抄目六一紙

「御乙」
（第三十一紙）（原第三十一紙）
尊容鈔目録一巻
深秘抄目六一巻切紙
廟抄目六一巻切紙
「諸目録」
（第三十二紙）（原第三十二紙）
刑部入道渡進西経蔵（朱書）
唐本一切経目録上下
高山寺経蔵聖教内真言書目録一巻
法皷臺聖教目録上中下欠
顕聖教目録一巻
禅上房書籍欠目録一巻
聖教目録禅浄房灌頂一巻
林月坊等聖教目録一巻
方便智院聖教目録　二帖
東経蔵本尊御道具已下請取目録一巻
高山寺印一枚

（九三）

已上古目六分
高山寺経蔵聖教内真言書目録一巻「写古目六欠分除朱墨之鉤点」（朱書）
法皷臺聖教目録上中下「上中写古目六欠分除朱墨之点下巻新補闕了」（朱書）
顕聖教目録上下「古目六甲乙外作一巻仍題号上下」（朱書）
方便智院聖教付御流并諸目六目録一巻古目録七十余合今見在分拾聚納之二十合新作一巻并付御流二合諸目六一合了（朱書）
笛入子六合目六一巻「無古目六新記之」（朱書）
已上新目録分
「都納一合」（朱書）

右にあげた「目録」部分の中で、「東第十七」までは、個別の聖教に対する目録である。「御」の甲乙部分は、覚深法親王の施入したものである。

このようにしてみると、「諸目録」のみが高山寺の聖教目録群として、一括されている事は明らかである。

8　「古文書等入日記」（高山寺古文書　第一部273）

はさみ箱　入日記
（中略）
（紙背）

已上笛之内納之一巻目六載了
寛永十一一六月廿一日
顕経蔵有之聖教箱之内取出分
一六帖重書東箱納之
一遺告一帖御流甲箱納之
同有之絵箱内
一両界万タラ　五幅
一縄床樹御影　一幅
一花厳祖師影　二幅
一涅槃像　一幅
一文字種子上人筆　一幅
一八字文殊種子上人筆　一幅
已上顕経蔵目録載分也

この文書の記載は、現在知られている『笛入子六合目録』の形成過程を物語るものである。波線を付した部分は、①当時の「顕経蔵」（『高山寺聖教目録』に該当する）から「六帖重書」と「遺告」を取出し、『方便智院聖教目録』（新目録）に対応する「東箱」に収蔵替えをした。②

同じく「顕経蔵」にあった「絵箱」の中から「両界万タラ」他を取り出した、というものである。ただし、この②に関しては、その後どのような処置を行ったのか不明である。②部分に記載された絵画は現存しているものもあるが、聖教目録との対応関係は不明である。建長年間の『高山寺聖教目録』末尾の「一百一乙」箱内にあることを示すものとも見られるが、後世の作品も含まれており（例えば「花厳祖師影」の作成年代は室町時代とされる）詳細はわからない。

いずれにしても、寛永十年の聖教と聖教目録の整備が終了した後にも、引き続き整備が実施され所属替えが行われていたことが知られる。

近　代

9　『宝物寄附物古文書什物取調牒』二種

本資料は現在知られている限り二点が存在している。仮に、記載年代の順に第一次版、第二次版とする。(注十六)

まず、第一次版について述べる。作成時期は、識語によると、明治十八年七月二日であり、当時の高山寺住職錦小路証成師により作成された記録である。明治期の高山寺経蔵における聖教の収蔵状況を物語るものとして極めて重要な資料と言える。表紙に、「明治十八年七月二日改正新写京府庁并法務□所□」という書込があり、これが作成時期と考えられる。資料の随所に、検印とおぼしき「封」という印記や欄外などに丸印や「同」、「一項」、「第七項」などの書き入れから、実際の高山寺蔵書等が点検されたものであることがわかる。いわば、下書き・点検用の性格を有するものであろうか。

全体の構成は、

宝物部
什物部
什物追加之部
（法皷臺聖教）（注　資料には記載がなく仮称）
高山寺法皷臺古文書

の五分類となっており、それぞれ宝物、聖教、文書などを記載する。（法皷臺聖教）以外は基本的には一点ずつ名

（九五）

称（書名）、点数を示し、必要に応じて筆者（作者）、体裁量目等の情報を記載する。

次に、第二次版について一言する。一次版にならって構成を示す。

宝物
什物部
寄附物部
高山寺法皷臺聖教目録
宝物之内
高山寺法皷臺古文書

本資料は、第一次版の浄書版であろう。その理由として、第一に、本資料には、奥書部分に「明治十八年七月二日」の上から墨書で「九月十二日」と上書訂正しており、時期的に僅かに第一次版より下る。第二に、奥書部分の住職他の署名に押印がある。このことから、この第二次版は京都府庁への提出用であり、実際に提出されていたものかも知れない。なぜなら、表紙裏面に「昭和十三年五月卅日」に当時の寺主土宜覚了師による書き込みがあり、この時期に高山寺に某氏から寄進されたとの記事がある。つまり、明治十八年に提出された本資料が五十数年後に再び高山寺にもたらされたということであろう。

（九六）

しかしながら、「高山寺法皷臺聖教目録」部の末尾には、

右者悉皆写経聖教ニシテ七八百年以前之稀世之珍書有之可崇重尤可秘蔵者也
明治十八年五月三十一日

という書き込みがあり、第一次版の七月より早い時期の記事もあり、本資料の作成時期をさらに検討する必要があるかもしれない。

さて、これら二点の資料に記載された、聖教目録に関する記事は以下の通りである。一次・二次に分けて「宝物部」などの所属部名とともに記載順に示す。

第一次版

「宝物部」

（五オ）

一　唐本一切経目録　同　箱入　三帖

「什物部」

（七ウ）

一　活字板一切経目録　但経巻仕立五巻入　壱筥

（八ウ）

一　聖教目録　箱入　十一巻

（三三ウ）

「東十三」

一　同（潅頂）目録　一巻

（五四ウ）

「第廿四」

一　高山寺並山内支院聖教目録　一箱

（五八ウ）

「高山寺法皷臺古文書」

「眼箱」

「三号」

一　木抄入目六　壱通

第二次版

「宝物」

（四ウ）

一　唐本一切経目録　同　箱入　三帖

「什物部」

（七ウ）

一　聖教目録　写本　九巻十（ママ）箱

（八オ）

一　活板一切経目録　同　五巻

（三一ウ）

「東十三」

一　同（潅頂法則）目録　一巻

（四九ウ）

「第廿四」

一　高山寺并山内支院聖教目録　一箱

（五三ウ）

「高山寺法皷臺古文書」

（九七）

「眼箱」
「三号」
一　木抄本　入目六　　一通

以上、両本を併記して見ると、細部に異同が見られる。一次版を基準に見ると、

①「活字板一切経目録」→「聖教目録」との掲載順が逆。
②「聖教目録」→十一巻に対して、九巻。
③「木抄」→二次版には「本」、空白の後「入目六」

ここでは、主として本稿に関する異同のみを挙げたが、実際には両本の間には、多くの異同や修正の跡が見られ、第一次版で点検・修正が施された浄書版という位置づけが第二次版なのであろう。

注目すべきは、右の②で、「聖教目録」箱の内容が当初十一巻であったのに、第二次版では九巻に減じている。この九巻という巻数は、現在高山寺聖教類第一部として登録され、聖教目録が一箱に納められている、193号の九巻と一致する。ここに納められているのは、すべて寛永期の聖教目録であり、実際に利用・管理する目的で、現存聖教とのインスペクション、目録の作成が行われたものである。

以上、鎌倉時代以降、近代に至るまでの聖教目録・伝記類・文書等から見えた聖教目録の保管と整理の過程を概観してきた。これまでに判明した点をまとめておく。

①高山寺創建当初から聖教目録は一括して収蔵する意図が見える。
②これが、「聖教目録群」として名実ともに一括されたのは、室町時代の『方便智院聖教目録』(旧目録)を嚆矢とする。
③現在の形になったのは、江戸時代寛永年間『方便智院聖教目録』(新目録)である。
④明治期にも目録の構成は変化がないが、その目録と実際の聖教との対応関係失われている。

二　寺宝から見る聖教目録

次に、高山寺に伝えられた世界的に著名な宝物の記録について検討する。すべての寺宝を見ることは不可能であるので、主に『鳥獣人物戯画』、『華厳宗祖師絵伝』の二点を主要な典籍とし、必要に応じて他の重要典籍についても言及しつつ、これら資料と聖教目録との関わりを検討する。

10　「仏像目録」（第二〇一箱7-20）

高山寺における、仏像・仏画を記した目録として最も古いものは「正治元年」の年期を有するもので、西暦一一九九年にあたる。これは、明恵上人が後鳥羽院から栂尾の地を賜り高山寺を再興した建永元年（一二〇六年）より以前のことである。つまり、高山寺とは別の場所で作成された目録と仏像類が、後年高山寺に施入されたものであろう。追筆で「聖教籦箱三合」とある書入れは、高山寺僧が記載したものであろうか。他に、『高山寺縁起』の東経蔵部分の記事に「此外華厳天台法相等章疏并真言書籍仏像等納之目録別在之」とあり、ここに言う「仏像」や「目録」とは、あるいはこの事を含むとも見られるが、他に関連する資料が見当たらず推定の域を出ない。

仏像目録
両界曼荼羅一丶二幅
五秘蜜一舗二幅
北斗曼荼羅一丶二幅
同円曼荼羅一丶二幅
孔雀明王一幅
愛染王龍蓮房
普賢延命一幅
弁才天一丶
四天王像各一丶
如意宝珠像
高野縁起二巻
摩羯幡一舗
八字文殊曼荼羅一舗二幅半
愛染王一丶一幅半
同曼荼羅一幅半如形
薬師如来像一丶一幅半
尊勝曼荼羅浄円房
恵果御影　大師御影
六字明王一丶
計都星影像
金剛夜叉一丶
白衣像唐本
一幅薬師像定智房
（追筆）「聖教籦箱三合」
正治元年五月廿九日（花押）

（九九）

11　『聖教目録禅浄房灌頂』（寛喜三年、建長三年）

本資料に直接寺宝に関わる記述は見られない。しかし、以下のように「宝物」という記事の付された唐櫃が存在していたことが知られる。この唐櫃は、後年作成された『宝物寄附物古文書什物取調牒』（明治十八年）の宝物部に記載されている「黒塗辛櫃」一合のことを示しているかも知れない。なお、検討を要する問題である。

（第十紙）
黒漆小唐櫃一合納仏舎利大師御筆金像等宝物

右のように記載された種々の「宝物」が具体的に何を指すのか判明しない。高山寺に現存する、いずれの寺宝と関連があるのかについても現状では不明である。このような状態であるが、本資料の記事は高山寺草創期において、すでにいわゆる寺宝というものを認識しており、一括して収蔵しようという意思が見られるという点で貴重なものである。

12　『高山寺聖教目録』（建長二年カ）

本資料には、次のような記事が巻末に見られる。

（第一百一乙）
義湘元暁絵并能恵得業絵等納一合
兼康筆絵本一巻此ハ禅堂院ニ在之

前述した通り、『高山寺聖教目録』の一百一乙函は書籍以外の寺宝類と聖教目録を収めた箱である。当時経蔵には「義湘元暁絵」（華厳宗祖師絵伝）と「能恵得業絵」（能恵法師絵巻）ほかの絵本が一箱に納められていたことが知られる。この内、「義湘元暁絵」は現存しており、後世の記録にもしばしば記事を見出すことが出来る。「能恵得業絵」については未勘であるが「能恵法師絵巻」または「能恵法師絵詞」と称される鎌倉時代書写になる絵画が広隆寺本として知られているが、それと同種のものであろうか。残念ながら高山寺には現存していない。

また、禅堂院には「兼康筆絵本一巻」があった。この絵本の内容、および兼康という人物について知るところ

は少ない。建長五年の『高山寺縁起』の「禅堂院」部分には、以下のような記事が見られるので、あるいはこの事を指しているのであろうか。

一禅堂院一宇三間四面檜皮葺
（中略）
毘沙門善知識西兼康筆

禅堂院の西面持仏堂に華厳宗に関係する仏画が掛けられており、これはその一部である。この「善知識」の仏画を描いたのが兼康であるとするが、両者同一の「絵本」であるのかは未勘である。同時代の絵師として宗内兼康なる人物が活躍していたことが知られる。この兼康と時期的には該当するかも知れないが確証はない。後述するが、この「兼康筆絵本」が禅堂院に掛けられていた「善知識」であるならば、明治以降の記録にも見えることから、これ以降長年に亘って高山寺に所蔵されていたことがわかる。

本目録には、寺宝の名称が明確に記載され、それが、聖教目録とともに合わせて収蔵されていたことは明らかである。

13 『高山寺縁起』（建長五年　推定）

先述したとおり、本資料は高山寺草創期の状況を知る貴重なものであり、寺宝に関しても以下のように記載されている。ただし、主要な典籍のみ抜書する。

（7ウ）
一、羅漢堂一宇
（中略）
絵像十六羅漢一舗二体合八舗俊賀法橋写唐本施入之
（8オ）
中尊唐本絵像釈迦三尊各一舗
遺弟信慶圓道房施入之
同絵像十六羅漢各一舗
上人在生之時嘉禄三年四月十日成暹威儀師仁和寺円成房成俊真弟子
為二親報恩施入之
同絵像廿天一舗信慶施入之

（一〇一）

（一〇二）

後面唐本絵像阿弥陀如来一舗同施入

一、経蔵二宇　　東経蔵

（中略）

（9ウ）

此外華厳天台法相等章疏并真言書籍仏像等納之目録別在之

（13ウ）

抑壇上所備仏具等本是上人年来所持仏具也而彼仏具上人昔於紀州白上峯ニ練行之時於仏眼尊ノ前斬右耳之刻彼血奔散テ点テ本尊ノ蓮座ノ并閼伽器等畢其血朽入テ于今不失遺弟等依貴重此事納置彼仏具以別仏具所居改也為決後日之疑聊以記子細矣

持仏堂南二間所立一脚縄床為禅所

縄床左障子押於上人縄床樹座禅真影

自上人在世在之擬凡僧座禅之影云々

恵日房成忍筆銘即上人自筆也

又傍安慈心房覚真民部卿長房卿真影成忍筆

（中略）

南面学問所　　右壁奉懸安

毗廬舎那五聖曼荼羅一舗成忍筆最後本尊云々

a字宮殿法門図一舗宮殿同筆梵漢字上人筆

毘沙門天霊夢像一舗同筆

このように、寺内各所に仏像・絵画などがあったことが知られる。

この内、経蔵の部分（9ウ）に記載された「仏像等」という記事は、『高山寺聖教目録』の第一百一乙に見える「義湘元暁絵并能恵得業絵等」を示すのであろうか。前章で検討した「目録別在之」の書入れも関連を伺わせる。

（13ウ）波線部、禅堂院の記事には、「仏眼尊」、「上人縄床樹座禅真影」が見える。これらも高山寺に現存する寺宝であるが、この時期の聖教目録等に記録は見られない。

三　特に『鳥獣人物戯画』について

『鳥獣人物戯画』については、美術史の分野等から多く

の論考があり、改めて言及するまでもないことであるが、近年、多くの新発見・事実が現れており、ここで再度、総合的・通時的に検討を加えていくこととする。特に、これら寺宝がどのように保存・管理されていたかについて考察することは、本稿にとっても重要な問題である。

14　『鳥獣人物戯画』丙巻巻末書入れ

現在、四巻に仕立てられている『鳥獣人物戯画』の丙巻に、以下のような書き入れ（奥書とする場合が多い）が見られる。この資料は日本のみならず世界的にも著名な作品ながら、成立について不明であるばかりか、いつ、如何なる経緯で高山寺に施入されたかの詳細を示す確実な証拠は存在していない。丙巻末尾に以下の書入れが存在している。

秘蔵々々絵本也
拾四枚之也
建長五年五月日竹丸（花押）

建長五年は、高山寺では『高山寺縁起』が高信により作成された時期であり、もし、この時に高山寺に施入されていたなら、何らかの記載があっても良いはずであるが、寺内の資料や聖教目録には一切記録を見出すことが出来ない。この点に関して、以下の言及が最新かつ包括的である。

「この段階（筆者注　丙巻末の建長五年を表す）で鳥獣戯画が高山寺に蔵されていたのか、はなはだ疑わしい。というのも、この奥書を記した「竹丸」は、その実態は不明ながら出家前の男子の名で、鎌倉時代半ば頃の高山寺の性格を考えると、こうした子弟がいたとは考えにくいためである。この段階で、鳥獣戯画は高山寺とは別の場所にあった可能性が高い。また、高山寺の目録類にも鳥獣戯画の名が確認されないことも、この可能性を高める。」（土屋貴裕「高山寺の至宝――鳥獣戯画と明恵上人ゆかりの美術――」、図録『特別展鳥獣戯画京都高山寺の至宝』、東京国立博物館朝日新聞社、二〇一五年）

このように、その内部に記載された書入れからも、高山寺の鎌倉時代の聖教目録に記載が見られないことから

（一〇三）

見ても、『鳥獣人物戯画』は、後年になって新たに高山寺にもたらされたのである。その時期に関しては後述する。

15　『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』(永正十六年)

『鳥獣人物戯画』の施入に関する研究では、すでに美術史の立場から多くの論考が公刊されているが、中でも最も先駆的で、かつ、確実な論拠を持って言及しているのは、福井利吉郎氏である。さらに上野憲示氏は、この資料を写真複製を付して紹介されている。(注十七)以下、複製部分を翻刻して示す。

一　上人ノ御絵　上中下以上三巻箱一ニ入
一　義湘元暁ノ絵取合テ六巻箱一ニ入
一　シヤレ絵三巻箱一ニ入
(中略)
此分東御房江渡申処也
于時永正十六年己卯六月五日　地蔵院弁助
一　顕経蔵ノ分東御房江渡申箱□入
(以下略)

本資料については、江戸時代寛永年間に作成された目録『方便智院聖教目録付御流目録并諸目六』に次のような記載が見える。

「諸目録」
(中略)
東経蔵本尊御道具已下請取目録一巻
高山寺印一枚
已上古目六分

書名はやや異なるものの、江戸時代初期までは本資料も高山寺の目録として認知され、かつ、「古目六」としているのは、寛永期の聖教類整備以前に、すでに高山寺に存在していたことを示している。これは、上野氏が紹介している本資料の記事と矛盾しない。

現時点で、この『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』

の具体的な内容を把握できていないが、右の記事からは室町時代永正年間に『華厳宗祖師絵伝』と『鳥獣人物戯画』が「箱一ニ入」れられて、高山寺東経蔵[注十八]に所蔵されていることが判明する。

奥書からは、これら寺宝が「東経蔵」にあったこと、それを高山寺の僧房の一つである地蔵院弁助が「東御房」へ「渡」したという内容であることが分かる。

地蔵院は、仁和寺の信厳を一世とする比較的新しい塔頭で、弁助はその付法弟子である。記録によれば[注十九]、文明年間の活動歴も知られるので、十五世紀後半～十六世紀にかけて活動した僧侶である。

「東御房」というのは、高山寺の方便智院であり、東坊と称される。この時期の方便智院の僧侶は、第九世、明律上人弁朝が同時代と見られる。弁朝は記録によれば、「弁朝　□□町大納言広□第五息／文亀三年十二月九日出家永正元年十二月廿□仕／永正十八年四月十五日入壇大阿闍梨地蔵院弁助上人／天文三年七月五日入滅　四十五」とあり[注二十]、弁助との関係の深さがうかがえる。この事から、地蔵院の弁助から方便智院弁朝へと渡されたとしても不思議ではない。

地蔵院の一世信厳法印は、もと仁和寺に住しており、応仁の乱を避けて高山寺に移ったとされる。その時に、仁和寺で信厳所持の聖教などが合わせてもたらされたと考えるのは不自然ではないだろう。地蔵院は、高山寺の記録では「中御室」とも注記されており、そうであれば、信厳は院政期の白河天皇の第二皇子である「覚行法親王」の流を汲むものとなる。『鳥獣人物戯画』も、仁和寺を経て高山寺にもたらされ、信厳―弁助―方便智院弁朝と移管され、この時期に高山寺「東経蔵」に収蔵されたとする見方は自然なことであろう。

16　『華厳縁起絵巻』裏打紙」（元亀元年）

本資料は、やはり福井利吉郎氏により早くに言及されている著名なものである。この記録から、先の永正十六年から数十年後にも絵巻類は一括して保管されていた事が判明する。以下、福井氏の論文を引用する[注二十一]。

「之れは同寺の華厳縁起を明治十六年博物局で修繕した時、其の古い裏打紙から見出されたものであつて、徳

（一〇五）

川時代の研究家には全く知られなかつたものである。

華厳宗祖師義湘大師絵四巻明恵上人絵三巻元暁大師絵二巻以上九巻獣物絵上中下同類巻二巻（開田殿□□本）都合十一巻本是／高山寺東経蔵之具也先年兵乱之時足軽共執散為彼兵火所々焼失了／然坊人共拾集之間此坊取置也寺家有再興之時節可令奉納彼蔵也／後世留守門人可得其意不可存私仍記置之也時元亀元年庚午七月廿一日　［羊］僧□性（花押）

この記事を残した「羊僧□性」という人物について、高山寺の記録を検するに、「羊僧」は「啞羊僧」の略称、「□性」は、中坊観海院に「真性法印」という僧侶が該当するが確実ではない。ただ、中坊観海院は「開田御室御住房」との書き入れもあり、右の記事とは一致することは注目して良い。記事を見るに、戦乱により東経蔵にあった絵本類は、バラバラにされ、あるいは焼失して原形を留めず、かつ、すぐに復元することも難しい状態に置かれた。そのため、取り敢えず「此坊」に保管しておくが、

（一〇六）

高山寺再興の時には、再度、「彼蔵」に奉納せよ、という書き置きを「□性」が書き残した、ということである。「此坊」とは、状況から見て方便智院ではなく、真性とするなら、観海院という推定もできようか。(注二十二)

いずれにしても、先の『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』の記事と、本資料との検討した点とは矛盾しない。要するに、仁和寺を経て高山寺僧へと受け継がれた『鳥獣人物戯画』は、この時期に高山寺東経蔵に保管されることになり、室町時代十六世紀後半の、元亀年間にも依然として『華厳宗祖師絵伝』および『鳥獣人物戯画（ここでは「獣物絵、同類」と呼ばれている）』が東経蔵にあったことが知られるのである。

17　『笛入子六合目録』（寛永十年）

江戸時代寛永期に仁和寺覚深法親王の命により大規模な経蔵の整備が行われ、合わせて聖教目録も新たに現状と合わせる形でインスペクションと新規作成が行われたことは、前述した通りである。この、巻末部分に絵巻が記録されていることは、夙に知られてきた。(注二十三)

筆者も、高山寺において原本調査したことがあり、これを踏まえて以下に紹介する。

意

義湘大師絵四巻（朱）不足今度調三巻了重可調本様

元暁大師絵二巻（朱）上下

絵本一結（朱）七十□□内少□□也歟（墨書）顕経蔵目録之甲乙箱外能恵得業絵等并兼康筆絵本一帖之蔵此等也

寛永十年十月廿五日新記之

（朱）件六合分可為山中不出也

（別筆墨書）慶安三年六月廿七日交合之添墨点了

（「絵本」行ニ対応スル裏書）

（朱）或記ニシヤレ絵三巻ト云者也

本資料も、寛永期の聖教再編の際に新たに作成された、文書類を別途保管して管理するための目録である。六合とは、文書類を「眼・耳・鼻・舌・身・意」の六箱に分けて収蔵したことによる。この内の六番目「意」に相当する箱が、右にあげた部分であり、絵本類が一括して納められている。注目すべきは「絵本」部分の裏書きに、加筆時期は不明ながら朱筆にて「或記ニシヤレ絵三巻」と記載されており、この絵本の中に『鳥獣人物戯画』が含まれていた事が判明する。しかも、「シヤレ絵三巻」という記事は、15『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』の記事と完全に一致する。「或記」とは、この資料をさすと考えてもよいだろう。

中世以降、この江戸時代寛永期までの資料から、高山寺における寺宝類の変遷を聖教目録との関連でまとめる。まず、鎌倉時代には、『高山寺聖教目録』分として『華厳宗祖師絵伝』などが、禅堂院等の建物にある分は（兼康筆絵本）がそれぞれ収蔵され、少なくとも前者は聖教目録に登載された。室町時代には高山寺にもたらされていた『鳥獣人物戯画』が、十六世紀になると「シヤレ絵」として記録され始めた。また、この時期までに、寺内にあった『華厳宗祖師絵伝』とともに、『鳥獣人物戯画』も一括して収蔵されている。高山寺方便智院が戦乱等で廃絶の危機に至ったため、江戸時代寛永十年に、方便智院

（一〇七）

の管理から離されて、他の絵本類と一括されて、文書目録などとともに『笛入子六合目録』に記載され管理されるようになった。

18 「三宅玄蕃書状」（年期未詳）

次の資料は、年期未詳ながら、江戸時代中期頃の記録とされるものである。

猶〻絵十巻為持進候御請取可有之候以上

一筆致啓上候然者先日為持被下候され絵四巻義湘大師縁起四巻元暁大師縁起貳巻御叡覧被遊候處二何茂見事成絵二而被為入詠御機嫌候御事候首尾能候間可御心易候我等二能〻相心得可申入之由被　仰出候巻物共損申候修覆御望無之候哉猶委細中嶋小左衛門可申入候條不能詳候恐惶謹言

三宅玄蕃

六月十三日　□□（花押）

三尊院様

（一〇八）

ここにある「三尊院」は、円道房信慶を第一世とするもので、明治期にいたるまで続く数少ない僧房である。先行研究では、この記事は江戸時代初期の後水尾院に高山寺の絵巻を叡覧に供した時のものという。[注二十四] ここにある「され絵」が『鳥獣人物戯画』と目されている。巻数など一致しない部分もあるが中世から近世初期にかけて、依然として『華厳宗祖師絵伝』とともに伝来していることが分かる。

近　代

明治期に至ると、高山寺の寺宝類についての記録が高山寺内外に渡って残されている。以下、先行研究をたよりに、その概要を年代順に取り上げていく。

19 「壬申検査」について

明治に入ってすぐに高山寺に文化財調査が行われ、写真も含めたいくつかの記録が残されている。[注二十五]

明治五年（一八七二）、文部省博物局によって行われた

近代初の文化財調査。この調査には町田久成、蜷川式胤、内田正雄ら明治期の文化財行政を担う人々が参加し、伊勢、名古屋、京都の社寺や華族の宝物とともに、奈良では正倉院宝物の調査も行なっている。初めて写真による記録が行なわれ、横山松三郎が撮影を担当した。調査団は七月二十一日から二十三日の間に高山寺に滞在し、多くの文化財を調査しているが、その中には「鳥羽僧正筆画巻物　四本」と記される鳥獣戯画も含まれていた。

20　明治十四年『鳥獣人物戯画』「修繕ヲ加」
明治十六年『華厳宗縁起絵巻』「修繕ヲ加」

「おそらくはこの宝物調査（前述の壬申検査を指す）により修理の必要性が説かれたのだろう。鳥獣人物戯画、および華厳宗祖師絵伝はおよそ十年後の明治十四年から十六年（一八八一～八三）にかけて、博物局によって「修繕」が施された。[注二十六]」

実際に明治十四年に行われた修繕の記録は、これらを収めていた旧箱に付されている修理銘であり、それは次のようなものである。

明治十四年九月
（印記）「武田」
修繕ヲ加（印文未詳円印）

21　明治十七年　フェノロサによる什宝調査

明治十一年に来日したアメリカ人のフェノロサが、明治十七年、二十一年に京都古社寺の宝物調査、および写真撮影をしたことが知られている。その際の記録がアメリカのハーバード大学に残されている。これによると、フェノロサは高山寺の寺宝類も記録している。以下の引用は、村形明子氏の論文による。[注二十七]

高山寺
鳥羽僧正筆　高山寺絵本　4巻
〃　華厳縁起　6巻
信実筆　将軍塚の絵　1巻
兼康筆　兼康絵本　1巻

（一〇九）

春日明神
住吉・春日明神像　宅磨勝賀二世筆
(以下略)

Kozanji
Toba Sojo, Kozanji Yehon　4
Toba Sojo, Kegon Engi　6
Nobuzane, Shogun dzuka no ye　1
Kaneyasu, Kaneyasu Yehon　1
Kasuga Miojin
Sumiyoshi & Kasuga deities by Takuma Shoga 2nd

最初の「鳥羽僧正筆　高山寺絵本」とは『鳥獣人物戯画』四巻であることに間違いない。これ以外に、本稿で見てきた絵本でいうと、『華厳宗祖師絵伝』に加えて『兼康絵本』も記録されている。後者の二点は、建長年間の『高山寺縁起』、『高山寺聖教目録』以来の寺宝である。

また、フェノロサは後年(明治二十一年)、高山寺宝物の一部を写真撮影していることも知られる。その際のメンバーは、九鬼隆一、岡倉天心、フェノロサであった。このメンバーらによって行われた近畿宝物調査の際に撮影された記録写真が現存している。

(一一〇)

22　『宝物寄附物古文書什物取調牒』二種

前章でも取り上げた本資料にも寺宝類は記録されている。関連する部分のみ掲出する。煩を避けて、第二次版(浄書版)のみとする。

宝物
(中略)
一　鳥羽僧正絵　覚猷僧正筆　四巻
一　華厳宗祖師絵伝　信実朝臣筆　六巻

このように、明治期の高山寺の記録においても右の二点の絵本は「宝物」として現存していることが知られる。ただし、この資料(第一次版を含め)を検する限り、フェノロサの記録にあった「兼康絵本」という書名は見当たらない。

四　まとめ

さて、高山寺は鎌倉時代草創期以来、連綿として聖教目録を重要なものとして位置づけていたことについて、前号から本稿にかけて様々な観点から検討してきた。ここまでで明らかになった点をまとめておく。

① 高山寺には明恵上人存命当時の寛喜年間から聖教目録が作成されており、一般的には三度の大きな編成替えが行われた。

② その体制は、中世末期までは比較的創建当時の姿であったが、中世の混乱期に多大な被害を受け、もとの体制を維持することが物的・人的両面に渡って不可能な状態に陥った。また、同時期に他所から『鳥獣人物戯画』などの絵画・典籍類が多量にもたらされた時期もあった。

③ 聖教目録が一括してまとめられ、記録に残されるようになったのは、室町時代文明年間以降のことである。

④ 江戸時代寛永期に大規模な再建と復興作業を行われ、聖教と聖教目録も当時の現状に従って整備された。この期には、寺内の子院も聖教を保有することがあり、しばしば高山寺本体から子院への所属替えも行われ、聖教目録として記録されることがあった。

⑤ 江戸時代末期から明治頃までに、大きな所属変更があったが、それについての記録や目録は、まったく残されていない。特に、江戸時代末期の僧慧友は大規模な調査・点検を行い、多くの書き入れを聖教等に残しているが、聖教目録や聖教の収蔵状況についての記録が見られない。

⑥ 近代に入り、高山寺内外の関係者により、寺宝類の記録・修繕が行われ、特に、明治十八年には大規模なインスペクションと記録が残された。この記録により、現在の高山寺における聖教目録の保管状況が合計二箱にわたることが判明する。

（一一一）

注

一　高山寺蔵書と聖教目録の関係についての言及はすでに多くの論考がある。すべてをあげることはしないが、主要なものは以下の通り。

奥田　勲「高山寺経蔵古目録について」（宇都宮大学教育学部紀要、第二六号第一部、一九七六年）

高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経蔵古目録』（東京大学出版会、一九八五年）

築島　裕「高山寺経蔵典籍について」（『高山寺典籍文書の研究』（高山寺典籍文書綜合調査団、東京大学出版会、一九八〇年）

築島　裕「高山寺典籍文書綜合調査団の歩み――あとがきに代へて――」『高山寺経蔵典籍文書目録　完結編』（高山寺典籍文書綜合調査団、東京大学出版会、二〇〇七年）

さらに、近年、一般向けの図録解説にも次のように紹介されている。

「（前文省略）、鎌倉時代の草創期から今に至る間の約一万二千点の高山寺典籍文書の伝来が、概略把握可能となっている。これは世界的に見てもかなり希有なこと言えよう。高山寺草創期から代々続いて来た真摯で合理的な学問の成果であり、学問寺としての高山寺の面目躍如である。」（石塚晴通「明恵上人と高山寺の文化財」、特別展覧会図録『国宝鳥獣戯画と高山寺』、京都国立博物館朝日新聞社、二〇一四年）

二　例えば、『方便智院聖教目録』（旧目録）には「小野経蔵目録」（第一冊6オ）とあるが、これはただちに高山寺聖教と関係のある可能性は少ないが、今回は「目録」という書名を有している資料は原則として取り上げることとした。また、欠損等により「目録」の書名が欠けている場合においても、明らかに聖教目録である場合は記載し、検討の対象とした。しかし、「諸尊法目録」などの特定聖教についての目録などは除外した。

三　徳永良次「高山寺蔵『聖教目録禅浄房灌頂』に記載された聖教について――高山寺現存本と対比して――」（鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究』第二十三輯、武蔵野書院、二〇〇〇年一〇月）

四　宮澤俊雅解題「高山寺経蔵とその古目録について」（高山寺典籍文書綜合調査団『続高山寺経蔵古目録』（東京大学出版会、二

〇〇二年）

五　徳永良次「『禅上房書籍欠目録』解題」（高山寺典籍文書綜合調査団『続高山寺経蔵古目録』、東京大学出版会、二〇〇二年）

六　奥田　勲「高山寺経蔵古目録について」（高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経蔵古目録』、東京大学出版会、一九八五年）

七　注四文献に同じ

八　石塚晴通氏によると、『唐本一切経目録』は、東西経蔵のいずれかの聖教目録と目されている。（「唐本一切経目録」解題、高山寺典籍文書綜合調査団『明恵上人資料第四』、東京大学出版会、一九九八年）

九　高山寺典籍文書綜合調査団『続高山寺経蔵古目録』、東京大学出版会、二〇〇二年にある、該当部分の解題（池田証寿氏担当）では触れておらず、理行房は後のものとする。

十　宮澤俊雅「高山寺経蔵聖教内真言書目録」解説、（高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経蔵古目録』、東京大学出版会、一九八五年）

十一　注六文献の奥田勲氏、および注十文献の宮澤俊雅氏の解説による。

十二　奥田勲氏は「遅くとも宝治元年には名実ともに備わった方便智院が成立していたことが知られる。この方便智院が経蔵を持っていたかどうかは確証がないが、当初から存在していたと考える方が自然であろう。」とし、方便智院の経蔵が鎌倉時代から存在するとされた。（奥田勲「高山寺経蔵の室町・江戸時代の典籍について」（『高山寺典籍文書の研究』高山寺典籍文書綜合調査団、東京大学出版会、一九八〇年）

十三　「……経蔵自体も東西二宇から、一宇の石水院経蔵に纏め、法皷臺聖教も石水院経蔵や他の僧房に移された。特に天文年間（一五三二～五五）まで高山寺の中核を為した方便智院には、経蔵本や法皷臺本の他に、明恵上人・定真・仁真等歴代の書冊紙片が集積されるようになった。」宮澤俊雅解題「高山寺経蔵とその古目録について」（高山寺典籍文書綜合調査団『続高山寺経蔵古目録』、東京大学出版会、二〇〇二年）

十四　原本では目録第一、第二ともに下半分を失っていることが原因とみられる。

十五　金水　敏「方便智院聖教目録解題」（高山寺典籍文書綜合調査団『明恵上人資料第四』、東京大学出版会、一九九八年）

（一一三）

十六　本資料の第一次版は以下の文献に写真複製、翻刻を載せている。石塚晴通・池田証寿・徳永良次「明治十八年高山寺『宝物寄附物古文書什物取調牒』（影印・翻刻）」（平成二十一年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集、二〇一〇年）

十七　上野憲示「『鳥獣人物戯画』の復原と観照」（『日本絵巻大成6　鳥獣人物戯画』、中央公論社、一九七七年）

十八　ここでいう「東経蔵」は建長年間のそれではなく、現在の石水院の中にあった。

十九　徳永良次「高山寺諸院代々一覧」（平成十九年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集、二〇〇八年）

二十　「高山寺代々記」第四部第一九九函1

二十一　福井利吉郎『福井利吉郎美術史論集　中』、中央公論美術出版、一九九九年）。ただし、資料の本文は福井氏の翻刻を元に筆者が影印により点検、確認している。

二十二　この点に関して、以下のような文章を見出した。「東坊方便智院代々も天文頃で消え、最後の二代は三尊院代々と同名なので三尊院と合併又は断絶と考えられる。わずかに田中坊善財院、尾崎坊三尊院、山本坊報恩院、宝性院が高山寺最悪の戦国時代を連綿と存続したらしい。」（葉上照澄「高山寺の歴史と信仰」（『古寺巡礼　京都15　高山寺』、淡交社、一九七七年）

この記事を考慮すれば、方便智院はすでに廃絶していたことになり、観海院も実態はなく、裏書にあった「此坊」とは他の僧房であるかもしれない。

また、近時藤岡摩里子氏は『鳥獣人物戯画』と高山寺観海院との関係を論じた。卓見と言うべきであり、今後さらに検討していきたい。

藤岡摩里子「『鳥獣人物戯画』の伝来関係史料にみえる「開田殿」について」（早稲田大学大学院文学研究科紀要、第3分冊、Vol.54-3、二〇〇九年）

二十三　この記事に関しては、すでに詳述されている。鬼原俊枝「『鳥獣人物戯画』の保存修理について」（特別展覧会図録『国宝鳥獣戯画と高山寺』、京都国立博物館朝日新聞社、二〇一四年）

ただし、本稿において言及したように、原本には裏書があり、そこに『鳥獣人物戯画』についての朱書書入れが存在し

ている。

二十四　注二十三文献、一六〇頁

二十五　土屋貴裕「高山寺の至宝――鳥獣戯画と明恵上人ゆかりの美術――」（図録『特別展鳥獣戯画京都高山寺の至宝』、東京国立博物館朝日新聞社、二〇一五年）

米崎清実『蜷川式胤「奈良の筋道」』（中央公論美術出版、二〇〇五年）

二十六　注二十五土屋文献。三七頁。

二十七　村形明子「フェノロサの京都社寺什宝調査メモ：バーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵遺稿（Ⅲ）」（京都大学教養部英語学教室「英文学評論」四三集、一九八〇年）

（一一五）